

【研究資料】

「沖縄の文化と看護」を履修した看護学生の学び
—— 文化的気づきと看護への適用 ——

Learning Outcomes of Nursing Students Who Took
“Okinawan Culture and Nursing” :
Cultural Awareness and Its Application to Nursing

八木澤良子, 稲垣 絹代, 永田美和子, 佐和田重信

要旨

名桜大学看護学科では, 2013年4月より新しく2年次生選択科目として「沖縄の文化と看護」を開講した。内容は, 沖縄語・琉球藍染・古我知焼・三線演奏などの講義や演習で, 17名が受講した。講義終了後に「学びのレポート」を提出してもらい, 内容から文化的気づきを抽出し, 看護への適用や教育効果, また, 本科目継続にあたっての改善点などを検討した。

抽出された結果として, 【受講動機は沖縄文化への関心や生活で困ったこと看護に役立つこと】, 【自然の中での創作活動の素晴らしさ】, 【教員や学生と関わりながら楽しく学び発表もでき満足できた講義内容】, 【沖縄独自の文化と普遍的な文化への理解の深まり】, 【沖縄文化だけでなく地元の文化への興味関心の高まり】, 【伝統文化の学びを様々な場で活かす】, 【文化の価値を発見したり理解したことを看護に活かす】, 【地域の自然の中で味わった創作活動の学びを看護に活かす】, 【沖縄の文化を継承することとその為に必要なこと】の9つにカテゴリー化され, 文化の重要性と看護への適用が考えられていたことがわかった。

キーワード: 看護学生, 沖縄の文化, 教育効果

I はじめに

本大学では, 2013年4月より, 老年看護カリキュラムとして看護学科2年次生に新しく「沖縄の文化と看護」が選択科目として組み込まれた。この授業は, 講義と演習からなり, 沖縄の歴史に由来する伝統的な芸術文化(言語, 芸能, 伝統工芸など)の理論を学びながら, 学内外で実際に見学したり, 演習したりしながら, 看護への適用を考察する基礎的な能力を養うことを目的とするものである。具体的には沖縄語, 琉球藍染, 古我知焼, 三線が主な演習内容であった。

文化ケアを提唱したレイニンガー(1995)は, その看護論の中で, 「今日の急速に発展する多文化的世界にあって, 看護婦が, 多様な価値観や信念, および看護・健康・ケアリング・ウェルネス・病気・死・障害について様々な考えを持つ人々を相手に効果的に働き, 機能するためには, 多様な文化を理解することが不可欠である」と

している。さらに, 小野ら(2011)は, 看護者の異文化間能力に関する文献検討で, 「異文化間能力は, 看護者が対象者の文化に合致したやり方でケアを提供することを目的とし, 必要な能力を獲得するために努力し続けるプロセスである。そのプロセスの中では, 文化的気づき・文化的知識・文化的接触・文化的欲求といった概念が相互に依存し合っている。看護者の異文化間能力獲得のためには, 文化的気づき(文化的感受性)が最も重要視される」とまとめており, 「沖縄の文化と看護」の講義と演習を通して, 学生がレポートに記述してきた学びの内容から, こうした文化的気づきなども抽出し, 看護への適用や教育効果, また, 本カリキュラム継続にあたっての改善点についても検討した。

文化とは, レイニンガー(1995)の定義では, ある特定の集団の思考や意思決定やパターン化された行為様式を支配する学習され共有され伝承された価値観・信念・規範・生活様式を意味する。

II 研究目的

沖縄の文化と看護の講義と演習をとおして、学生がどのような学びをしているのかを明らかにする。

III 研究方法

研究期間は平成25年12月から平成26年11月で、「沖縄の文化と看護」を履修し、同意の得られた2年次学生17名から提出された講義全体の学びのレポート（1600～2000字）を対象とした。

研究依頼およびデータ作成方法については、倫理審査にて承認を得た後、学生全員が集まっている時に、研究の目的・方法・倫理的配慮を口頭と文書で説明し、研究の協力依頼を行った。同意書に署名をもらい、説明者も署名をし、双方で同意書を保存した。同意が得られた学生のレポートをコピーし、学生氏名、学籍番号、本文中の固有名詞などを塗りつぶし、匿名性を確保したデータを作成した。

分析方法は、学生の学びの部分を抽出、コード化し、類似したコードをまとめて抽象化してサブカテゴリー化し、さらに抽象度をあげてカテゴリー化し、カテゴリー間の関係性を明確にしていった。結果の信頼性を確保するために、複数の研究者でコード化やカテゴリー化し、

共同研究者全体で確認した。

IV 倫理的配慮

学生に対し、研究の目的・方法について、また、研究への協力・参加は自由意思であり、同意しなくても成績には一切関係はなく、その他の不利益も受けないこと、同意の撤回も随時可能であることなどを文書と口頭で説明した。作成したデータについては、研究目的以外には使用しないこと、個人のプライバシーの保護・匿名性の確保・秘密保持に努めること、研究結果は学会等で発表すること、研究終了後はデータを適切に処理することを合わせて説明し、研究協力願いにも記載した。

V 結果

本科目の到達目標として、①うちなーぐちで簡単な挨拶と自己紹介ができる、②三線で沖縄民謡が1曲以上は演奏できる、③伝統工芸の染物か陶芸品を完成できる、④沖縄の文化を活かした看護を考えることができる、の4項目が挙げられており、全ての学生が①～④までほぼ目標到達できていた。看護に関連した項目④では、コードが176個、サブカテゴリーが32個、カテゴリーが9個抽出され、表1のようにまとめて示した。

表1 「学びのレポート」のカテゴリー

受講動機は沖縄文化への関心や生活で困ったこと看護に役立つこと	<受講動機は沖縄文化への興味・関心>	『沖縄出身でないことが受講の動機』『もっと詳しく文化を知りたいと思い受講』『沖縄のことが知りたい受講動機』『県外から来たので、異文化を体験するために受講した』『沖縄でしかやれないことをやるために受講』『うちなーぐちが受講の動機』『文化の違いが面白いと感じた』『方言を知って沖縄の良さを知りたいと思った』『沖縄文化への関心があった』『沖縄出身でも沖縄についてあまり知らないことから受講した』『沖縄の文化について知るために受講した』『古我知焼きと藍染の体験したいので受講した』『選択科目は受講しないでおこうと思ったが、三線が弾けるという教師の紹介で受講した』『県外出身で古我知焼きと藍染が体験したいので受講した』『県外出身で沖縄は初めてのものばかり』
	<実習や日常生活で方言や文化の違いに困った経験がある>	『実習で言葉がわからずコミュニケーションが取れなかった』『実習では言葉の壁でコミュニケーションがとれなかった』『1年前に県外から来たが、教員や友人との会話でわからないことがあった』『県外出身で沖縄は初めてのものばかり』『18年間の生活との違いを痛感したので、文化の違いや継承を考えるために受講した』『実習の振り返りから、沖縄の文化についてもっと触れていればよかったと、この講義を受講』『実習で方言が使えず困った経験があった』『実習で方言が分からず困った経験があった』『沖縄の生活にカルチャーショックを感じた』『実習で三線ができず困った経験から受講した』『今まで伝統文化に触れてこなかったことが残念』『実習で三線が弾けた学生がいて楽しかった話を聞き残念だった』
	<看護に役立てたいために受講>	『世界での看護活動に活かすためのヒントを学びたかった』『沖縄の文化を知ること看護にも役立つと考え受講する』

自然の中での創作活動の素晴らしさ	<体験場所の自然や雰囲気が印象に残っている>	『体験場所までの坂道の苦労が印象的だった』『体験場所の雰囲気がよく癒された』『藍染体験場所の自然が開放的な印象だった』『体験場所の自然にも触れる機会があった』
	<印象に残った体験>	『最も印象に残ったのは三線・藍染・うちなーぐち体験だった』
	<体験型の学習によって五感を使ってより深く文化を理解できた>	『沖縄で、沖縄の文化と看護を学べる貴重な体験だと感じた』『五感で感じながら学ぶ貴重な体験ができた』『座学と課外での体験学習』『行動しなければ何も得られない』『野外に出て自分の目と手で学ぶことは刺激を受ける』『貴重な体験型の授業だった』『作品作りから、感性や個性を大切にすることが重要だと学ぶ』『自分で体験し、肌で感じることでより文化の理解が深まる』『文化に肌で触れ、新鮮であった』『体験することの大切さを実感した』『笑顔は心の元気だと学んだ』『地元の素晴らしさ、新しいことをする楽しみ、みんなと体験することで数倍に感じた』
教員や学生と関わりながら楽しく学び発表もでき満足できた講義内容	<学生や教員と楽しくかわり学ぶことができた>	『みんなでやることの楽しさ、充実感は「心の健康」につながる』『学生教員との交流でそれぞれの個性を知る』『普段関われない人たちとたくさん関わられたことを大事にしたい』『講義を通して普段話さない人や教員ともかわれた』『三線の演奏は困難だったが教員や学生とコミュニケーションをとれて楽しかった』『学生と教員全員が全員楽しみながら学べたのが良かった』『教員も楽しみながら真剣に講義しており、学生との距離も近く楽しく学べた』
	<練習があまりできなかったが個性が出て楽しんでできた発表>	『きちんと弾けなかったが楽しんで発表』『個性が出ていた発表』『発表会での役割の大変さ』『練習時間がとれず心残り』『楽しんで発表会を開けた』『緊張と三線演奏が下手で発表会はやりたくなかった』『教員の声掛けに楽しんで発表できた』『個性が出ていておもしろい発表だった』『楽しんでできた発表会』
	<ためになり満足できた講義内容だった>	『有意義な時間』『沖縄出身でも知らないことがあり、ためになった』『異文化でも自分の中に沁みできて楽しく感じられた』『多くのことを考えさせられた』『課外活動の体験は沖縄のことを知る良い機会となった』『県内・県外どちらにも役立つ講義』『知りたかった沖縄の文化を詳しく学べる講義内容があった』『今ある伝統文化や文献から昔の文化などいろいろ学べた』『いろいろなことを学べた』『自ら進んで体験し、皆と楽しみながら学べた』『多くのことを楽しく学んだ』『受講して楽しかった』『受講してよかった』
	<また受講したい>	『また受講したい』
沖縄独自の文化と普遍的文化への理解の深まり	<沖縄独自の文化の特徴の気づき>	『講義を通して内地の文化との違いを実感する』『沖縄の人は地元の歴史・文化を大切にしていることに気づきうれしくなった』『沖縄の文化は独自の文化であり伝統作品として受け継がれている』『沖縄の文化は繊細で楽しく陽気』『沖縄のゆったり感がこころのゆとりになる』『沖縄の文化はその土地ならではの先人の知恵や工夫で生み出されたものである』『沖縄の文化は独自の文化であり伝統作品として受け継がれている』『沖縄は他にも多くの文化をもつと考えた』『沖縄の文化は内部や外部からの刺激を受けながら進化しつつ受け継がれていると感じた』『沖縄の文化と他の文化を比べることができ、改めて独自の文化の良さをした』『沖縄文化の個性、希少価値、すばらしさを感じる』
	<文化からさらに理解できたこと>	『文化を知ることによってその人を知ることができるという発見が大きな収穫となった』『文化を意味づけ、表現していくことの大切さ』『人の歴史と切り離せない文化の在り方を考えた』『文化から生活やコミュニケーションの仕方がよくわかった』
	<他の学生にも受講を薦める>	『多くの学生に受講してもらいたい』『沖縄の文化を他の人にも知って体験してもらいたい』『この講義に満足しており他の人にも勧める』『沖縄の文化を受け継いで良さを知ってもらいたい』『特に沖縄の学生に受講してもらいたい講義』『もっと沖縄について深く知りたい』

沖縄文化だけでなく地元の文化への興味関心の高まり	<沖縄の文化についてもっと知りたい>	『琉球ガラスなども学んでみたい』『沖縄の文化についてもっとしりたいと思えた』
	<異文化体験で文化への興味が広がる>	『異文化は生活環境が変わって初めて興味がもてる』『異文化を体験することで文化が横に広がる』
	<異文化についても考えていきたい>	『他の文化があるから独自の文化が活かされる』『沖縄文化を理解しこれからも異文化について考えたい』『沖縄の異文化体験からこれから出会う文化へも興味を広げていきたい』
	<地元文化についての興味がわいてきた>	『地元のことも考えさせられた』『地元の文化もなくなってほしくないので、帰った時調べたい』『自分の地元の文化への興味がわいた』『沖縄の異文化体験からこれから出会う文化へも興味を広げていきたい』『地元文化を改めて感じる事ができた』『出身地の文化についてももっと知りたくなったし、大切にしたい』『様々な地域の文化、地元の文化にも目を向ける』『様々な文化を積極的に学びたい』
伝統文化の学びを様々な場で活かす	<三線やうちなーぐちをこれからも練習していきたい>	『これからも練習し、うちなーぐちを使いたい』『三線とうちなーぐちを実習や日常生活でも活かせるよう練習していきたい』
	<学びを様々な場で活かしたい>	『ボランティアや実習に沖縄文化を取り入れて活力につなげる』『体験を話して話題作りしたい』『沖縄の文化体験をすることで高齢者と話しやすくなる』『それぞれの土地の文化に目を向け、比較し、紹介していきたい』『歌や踊りも他の人と一緒にしたい』『学んだことを将来に活かしたい』『名護の町づくりに参画したい』
	<学びをボランティアや実習で活かせた>	『学びをボランティアで活かせた』『本講義の学びを実習やボランティアで活かせた』
文化の価値を発見したり理解したことを看護に活かす	<文化を理解することは看護するうえで大切である>	『国際看護学Ⅰの異文化看護や生活に根差した文化背景を尊重するということが振り返ることができた』『異文化看護のための条件である文化を知ることができた』『看護師として働くうえで大切な学び』『文化の視点を取り入れた看護の大切さを学ぶ』『文化に興味はなかったが、看護をするうえで重要だとわかった』『看護師は文化とアイデンティティについて理解が必要』『文化体験を看護に活かせるポイントを得られた』『看護学概論での学びとつながる』
	<他県出身の人が沖縄の文化の価値を発見し、地域の人々へのケアに活かせる>	『他県出身の人が沖縄の文化の価値を発見し、地域の人々へのケアに活かせる』
地域の自然の中で味わった創作活動の学びを看護に活かす	<看護をするうえで大切なこと>	『「こころのゆとり」は大切である』『思い入れのある患者の物も大事に扱いたい』『五感を通して体験していくことは、看護をするうえでも重要である』『言葉に対する敬意』『方言と同様、患者にも複数の背景があることを認識して看護を行うことが大切』
	<地域社会の人々との町づくりに参画していきたい>	『地域社会の人々との町づくりに参画していきたい』
	<貴重な体験から、沖縄ならではの看護を提供したい>	『貴重な体験から、沖縄ならではの看護を提供したい』
	<自然の効果を活かす>	『自然や自分と向き合う作品作り』『自然を通して他者との関係性を築いて行く』『自然のリラックス効果』『自然の原料で肌に優しい作品』
	<作品作りに集中することで脳の活性化につながる>	『作品作りは想像力を働かせて、脳の活性化がはかれる』『作品作りを通して、認知症予防や集中力をやしなうことができるのではないかと』『伝統工芸作りは病気の予防や回復に活かせる』
	<学びを看護に活かしたい>	『学びを看護に活かしたい』『看護に活かしたい』『学んだ文化を看護で活かしたい』『最後まで気を抜かず考えながら動く看護師になりたい』『学びを今後の看護活動に活かしていきたい』

	<p><方言や三線などは具体的な看護ケアに活かせる></p>	<p>『ものづくりや三線を通して交流が深まり、新たな感性が磨かれる』『実習でうちなーぐちで自己紹介したい』『うちなーぐちを使うことがケアになる』『発表会での盛り上げ方の工夫は看護に活かせる』『知らなかった世界を発見して看護師の仕事に役立ってる』『沖縄の文化は代替医療としても発展していく可能性がある』『高齢者や児童を対象に三線を看護に取り入れ生きがいにつなげる』『実習で三線を癒しに使いたい』『臨地実習では学んだ文化伝統を患者と共有することで看護に活かせる』『実習でうまくコミュニケーションをとりたい』『三線とうちなーぐちは実習で必要』『実習体験を振り返って、方言を使えると患者さんへのケアが変わると感じた』『方言と看護ケアに関する研究データから方言によるケア効果を期待する』『方言に関する研究から、看護での言語の重要性について学んだ』</p>
<p>沖縄の文化を継承することとその為に必要なこと</p>	<p><沖縄文化を継承することが大切である></p>	<p>『地域の魅力を失わないため文化を継承する必要がある』『体験して広め継承することが大切』『沖縄出身者としての自信と誇りを持って、その良さを伝えたい』『沖縄の文化を受け継いで良さを知ってもらいたい』『地域に出て、地域の人と共に考えていくことが必要』</p>
	<p><地域の人と文化を尊重して関わる大切である></p>	<p>『地域に飛び込んで信頼関係を作ることの大切さを学んだ』『地域に飛び込んで、人々から学び、文化を尊重することが大切』『地域の人々にうちなーぐちであいさつし、文化を尊重する』『土地の人への敬意をもってつながり、考えを理解できる』『地域交流に良い機会となった』</p>

そこからさらにカテゴリーを図1のように関連図にすることができた。

【受講動機は沖縄文化への関心や生活で困ったこと看護に役に立つこと】が多く、全体を通して、【自然の中での創作活動の素晴らしさ】や【教員や学生と関わりながら楽しく学び発表もでき満足できた講義内容】という感想が多かった。そこから【沖縄独自の文化と普遍的な文化への理解の深まり】、【沖縄文化だけでなく地元の文化への興味関心の高まり】が学生自身から自然に湧き起

こっていた。こうした体験学習や創作活動によって、【地域の自然の中で味わった創作活動の学びを看護に活かす】、【文化の価値を発見したり理解したことを看護に活かす】、【伝統文化の学びを様々な場で活かす】と、看護やその他の様々な場への適用まで具体的に考えられていた。さらにこれらを実践するうえで重要となる、【沖縄の文化を継承するために地域の人を尊重して関わることの大切さ】にも気づくことができていた。

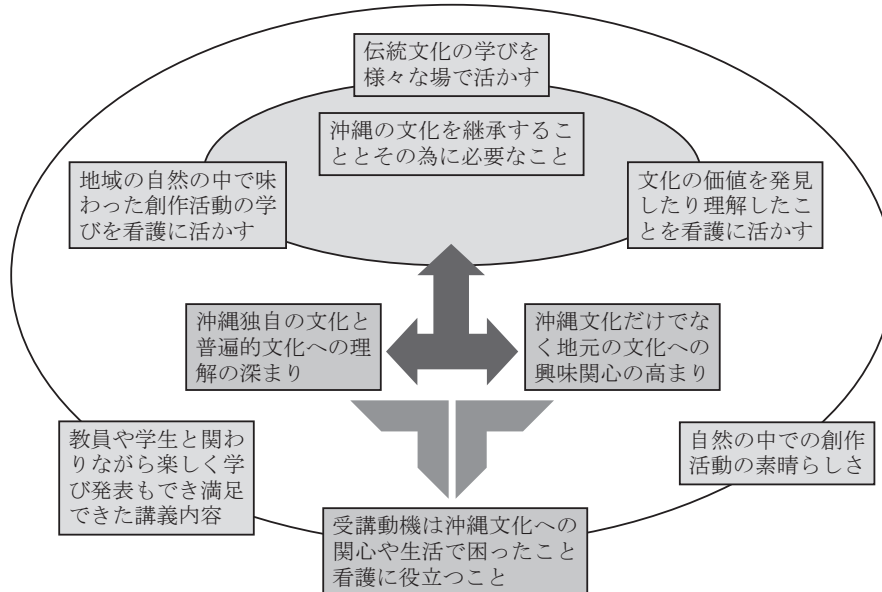


図1 「沖縄の文化と看護」学びのカテゴリー関連図

VI 考察

以下、【】はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー、『』はコード内容を表記する。

1 【受講動機は沖縄文化への関心や生活で困ったこと看護に役立つこと】

研究対象学生17名のうち県内出身者は8名、県外は9名となっており、履修動機もく沖縄文化への興味・関心〉が多かった。『沖縄のことが知りたい』、『県外から来たので異文化を体験するために受講』した県外からの学生や、具体的に『古我知焼きと藍染を体験したいので受講』、『うちなーぐちが受講の動機』という学生など、シラバスを確認して明確な目標を持って受講している学生もいた。この他に『選択科目は受講しないでおこうと思ったが三線が弾けるという教師の紹介で受講』したと、教員からの紹介も影響していたことがわかった。本科目は選択科目であることから、シラバスに具体的な講義内容を書いておくことや教員の声かけなどで受講を促していくことも有効であることがわかった。

全国から学生が集まってくる本大学では、県内・県外いずれの学生にとっても大学生活そのものがすでに異文化体験の場となっている。実際に〈実習や日常生活で方言や文化の違いに困った経験がある〉という状況がみえており、『沖縄の生活にカルチャーショックを感じた』、『18年間の生活との違いを痛感したので文化の違いや継承を考えるために受講』という県外出身者ならではの切実で率直な動機付けがあった。特に看護学生は、1年次より「教養演習」「基礎看護実習1」や「ケアリング文化実習」などで地域の人や患者さんに関わる機会が多く、『実習で言葉がわからずコミュニケーションがとれなかった』、『実習で三線ができず困った経験から受講』など、困った経験からのものが多かった。また、県内出身者でも『沖縄出身でも沖縄についてあまり知らないことから受講した』という学生もおり、今の若者文化を持つ学生にとってはすでに地元文化すらも異文化になっているとも考えられた。また、将来看護師を目指す学生ともあって、『世界での看護活動に活かすためのヒントを学びたかった』、『沖縄の文化を知ること看護にも役立つと考え受講する』と、初めから〈看護に役立てたいために受講〉した学生もいた。

以上のことから、受講動機にはすでに多くの文化的気づきが見えており、学習意欲を高めるための大きなモチベーションとなる可能性があると考えられるため、本格的な講義に入る前に、自己紹介の中でどんな受講動機があったのか、そのためにどのような内容の講義を受けたのかを教員や学生同士が確認しておくことは、最終的な目標達成のためにも有用であると考えられた。

2 学習環境について

1) 【自然の中での創作活動や体験学習の素晴らしさ】

本科目では、古我知焼きと藍染の創作活動については非常勤講師の協力を得て大学からバスで20分ぐらいの学外・山間部で行っている。そのためか、『体験場所の雰囲気がよく癒された』、『体験場所の自然にも触れる機会があった』など、〈体験場所の自然や雰囲気が印象に残っている〉ことがわかり、自然豊かな体験場所に満足できていたと考えられた。また、『もっとも印象に残ったのは三線・藍染・うちなーぐち体験だった』、『五感で感じながら学ぶ貴重な体験ができた』、『野外に出て自分の眼と手で学ぶことは刺激を受ける』、『自分で体験し肌で感じることでより文化の理解が深まる』など、〈印象に残った体験〉であり、なおかつ〈体験型の学習によって五感を使ってより深く文化を理解できた〉と、自分の身体や五感を使って行う創作活動や体験型学習によって文化的気づきが得られ、満足した感想が多かった。

2) 【教員や学生と関わりながら楽しく学び発表もできた講義内容】

『学生と教員全員が楽しみながら学べたのが良かった』、『学生・教員との交流でそれぞれの個性を知る』、『教員も楽しみながら真剣に講義しており、学生との距離も近く楽しく学べた』、『講義を通して普段話さない人や教員ともかかわれた』など、〈学生や教員と楽しくかわり学ぶことができた〉と、満足できる環境で学べていたことがわかった。他の学生や教員との距離が近くなり、関わりの中でそれぞれの個性を知ることもできていた。このことは、大人数や講義室での一方的な講義形式ではなかなか難しいことであり、17人という学生数に対して、4人の担当教員と非常勤講師数名が密に関わることができていたためと考えられ、体験型かつ選択科目ならではの環境からのものといえた。さらに本科目では、学ぶだけでなく、できた作品の展示や紹介、うちなーぐちや三線演奏の披露を最終日のまとめとして発表会で行っている。受講動機でも三線を弾きたいという学生が多かったが、〈練習があまりできなかったが個性が出て楽しんで発表できた〉というカテゴリーから、『練習時間がとれずこころ残り』、『きちんと弾けなかったが楽しんで発表』と、発表自体は楽しんでできたが、演奏自体の完成度が低く、残念な思いが残っていたことがわかった。三線を持っていない学生のために貸し出しを行っていたが、騒音のために自宅で練習できない学生もおり、講義時間内・外での練習時間の確保を行って、確実に演奏でき、発表の場で完成度をあげられるような環境づくりをしていきたいと考えた。

全体的な講義内容については、『沖縄出身でも知らないことがあり、ためになった』、『県外・県内どちらにも

役立つ講義』というふうには、〈ためになり満足できた講義内容だった〉と、県内・県外どちらの出身学生にも知らないことがあって、役に立つことがわかった。『知りたかった沖縄の文化を詳しく学べる講義内容であった』、『楽しかった』、『受講してよかった』、『また受講したい』と、肯定的な感想が多く、講義内容の満足度は高いといえた。『異文化でも自分の中に沁みてきて楽しく感じられた』という感想では、学んでいくうちに異文化を自然に受け入れることができ、それが楽しく感じられた様子がうかがえる。そして、また受講したいとの希望も多く、学ぶ楽しさや学習意欲が高められたと考える。沖縄の文化をすべて学んでもらおうと思えば限りがないが、受講の動機を聞きながら、今後も学生の生活のために学習意欲を高められるよう希望を募ったりして柔軟に内容を変更していくことも考えられた。

3 文化についての気づきと興味関心の高まり

1) 【沖縄文化だけでなく地元やさまざまな文化への興味関心の高まり】

『琉球ガラスなども学んでみたい』、『沖縄の文化についてももっと知りたいと思えた』など、〈沖縄の文化についてももっと知りたい〉と、学生自身からの具体的な希望内容や学習意欲の高まりがみられ、さらに『自分の地域の文化への興味がわいた』、『出身地への文化についてももっと知りたくなったし、大切にしたい』、『さまざまな文化を積極的に学びたい』と、〈異文化体験で文化への興味の広がり〉が見られ、〈異文化についても考えていきたい〉、〈地元やさまざまな文化への興味がわいてきた〉ことがわかった。具体的には、『異文化は生活環境が変わって初めて興味がもてる』、『異文化を体験することで文化が横に広がる』、『沖縄文化を理解しこれからも異文化について考えていきたい』、『沖縄の異文化体験からこれから出会う文化に興味を広げていきたい』という、文化的違いの気づきから積極的な学習意欲がみられた。これは、沖縄文化を学ぶことで得た気づきから、さらに慣れ親しんだ地元文化や他の様々な文化についても改めて見直したいという意欲が芽生えてきたと考える。県外出身者にとって生活環境が変わるということは、困った体験でもあったが、むしろそれが文化的気づきとなって異文化への興味に広がっていくことにつながっていた。そして〈他の学生にも受講をすすめる〉では、『沖縄の文化を他の人にも知って体験してもらいたい』など、積極的に他の人にも勧めていることから、文化を学ぶことの意義を得られた内容となったのではないかと考えられた。

2) 【沖縄独自の文化と普的文化への理解の深まり】

〈沖縄独自の文化の特徴の気づき〉では、『沖縄の文

化と他の文化を比べることができ、改めて独自の文化の良さを知った』、『沖縄の人は地元の歴史・文化を大切にしていることに気付くうれしくなった』、『沖縄の文化は繊細で楽しく陽気』であることや、『沖縄のゆったり感がこころのゆとりになる』などがあげられ、実際に地域生活に入り体験して五感で感じたからこそその気づきがみられた。そしてまた作品作りを通して、それらは『伝統作品として受け継がれている』ことなど、伝承方法の重要性も学んでいる。また、〈文化からさらに理解できたこと〉として、『人の歴史と切り離せない文化の在り方を考えた』、『文化から生活やコミュニケーションの仕方がよくわかった』、『文化を意味づけ、表現していくことの大切さ』、『文化を知ることその人を知ることができるという発見が大きな収穫となった』と、独自文化の違いを超え、文化の持つ普遍性と人間理解についても俯瞰してみることでできていた。

4 学びを看護に活かすために

1) 【文化の価値を発見したり理解したことを看護に活かす】

『異文化看護のための条件である文化を知ることができた』、『文化体験を看護に活かせるポイントを得られた』と、文化と看護についての接点を自分なりに考えられ、〈文化を理解することは看護するうえで大切である〉と気づくことができていた。また、『「国際看護学Ⅰ」の異文化看護や生活に根差した文化背景を尊重するということを振り返ることができた』学生は、再度この科目でその重要性を理解する機会になったと考えられる。さらに『文化に興味はなかったが、看護をするうえで重要だと分かった』と、この講義を通して看護への適用に気づくことができていた。〈他県出身の人が沖縄文化の価値を発見し地域の人々へのケアに活かせる〉では、むしろ沖縄文化に馴染んでいない県外出身者の人のほうが、文化の違いを感じやすく、その価値に気付いたり発見しやすいことや、その良さをケアにいかせるということ学んでいた。

2) 【地域の自然の中で味わった創作活動の学びを看護に活かす】

〈看護をするうえで大切なこと〉は、『「こころのゆとり」は大切である』、『思い入れのある患者の物も大事に扱いたい』、『五感を通して体験していくことは、看護をするうえでも重要である』、『言葉に対する敬意』、『方言と同様、患者にも複数の背景があることを認識して看護を行うことが大切』などが挙げられ、具体的に『高齢者や児童を対象に三線を看護に取り入れいきがいにつなげる』、『実習体験を振り返って、方言を使えると患者さんへのケアが変わると感じた』など〈方言や三線などは具

体的な看護ケアに活かせる>ことや、『自然のリラックス効果』、『自然の原料で肌に優しい作品』、『自然や自分と向き合う作品作り』で<自然の効果を活かす>ことや、『作品作りは想像力を働かせて、脳の活性化がはかれる』、『作品作りを通して、認知症予防や集中力をやしなうことができるのではないかと』と<作品作りに集中することで脳の活性化につながる>などの提案があり、<地域社会の人々との町づくりに参画していきたい>、<貴重な体験から沖縄ならではの看護を提供したい>と、ほとんどの学生に<学びを看護に活かしたい>という意欲が見られた。

看護においては特に感性の豊かさが求められるが、体験学習を加えたことで、理解しやすくなると同時に豊かな感性を使って看護にどう活かせるかも具体的にイメージできたと考えられる。

杉本(2006)は、健康について、個人の責任のみでなく、環境に対する働きかけも重要であるとしており、健康的な公共政策や地域活動なども看護には必要な視点と考えられ、学生の提案はこうした広い視点にまでおよんでケアリングマインドが芽生えていることがわかった。

3) 【伝統文化の学びを様々な場で活かす】

<学びをボランティアや実習で活かした>学生もいたことがわかったが、ここでの学びが日常的で実践しやすいものであるといえるが、やはり本講義だけでは、うちなーぐちや三線を日常に自由に使いこなすことは困難であり、これを様々な場で活かすためには、<三線やうちなーぐちをこれからも練習していきたい>というように、練習の継続が必要であろう。そのモチベーションとして、<学びを様々な場で活かしたい>という希望があり、『ボランティアや実習に沖縄文化を取り入れて活力につなげる』、『名護のまちづくりに参画したい』、『学んだことを将来に活かしたい』、『それぞれの土地の文化に目を向け、比較し、紹介していきたい』など、将来構想やまちづくりにも活かそうとする希望も見えて頼もしく感じられた。こうしたモチベーションは、その地域で生活し、人や文化と触れ合っていくことから生まれていくものと考えられ、わずかな時間でもこうして沖縄の文化を体験して学んでいったことで、魅力ある文化への愛着のようなものも芽生えていると考えられた。

5 地域文化を継承するための看護

看護をするうえで文化の重要性に気づくことができた学生は、さらに【沖縄の文化を継承することとその為に必要なこと】を提案している。『地域の魅力を失わないため文化を継承する必要がある』、『体験して広め継承することが大切』、『沖縄出身者としての自信と誇りをもって、その良さを伝えたい』と、<沖縄文化を継承するこ

とが大切である>ことの気づきと、さらにそのためにも、『地域に飛び込んで、人々から学び、文化を尊重することが大切』、『地域に飛び込んで信頼関係をつくることの大切さを学んだ』、『地域の人々にうちなーぐちであいさつし、文化を尊重する』、『土地の人への敬意をもってつながり、考えを理解できる』と、<地域の人と文化を尊重して関わるのが大切である>ことに気づくことができていた。地域の風土や歴史から浮かび上がってきた文化を地域の人から学び、そのプロセスにおいて、敬意をもって関わり、信頼関係を築くことの大切さ、その文化に生き、文化を継承・創造してきた高齢者や地域の人たちを尊重して関わるのが大切であると気づくことができていた。

小野(2011)は、異文化間能力について、「文化的知識及び文化的技能を獲得するには、文化的気づきが重要である。文化的気づきは異文化に属する対象者に向き合うとき、自分も持っている偏見や差別、想定などに気づくことである。文化的気づきがなければ、看護者は文化的押し付けをしてしまう危険が生ずる。個々の看護者が自己の文化に気づき、ケア対象となる人のそれとは違うことに気づくことが、文化的知識や文化的技能の獲得につながり、看護者の異文化間能力は高まっていく」と、文化的気づきから地域の人と文化を尊重して関わることにつながることの重要性を述べている。

さらに、その気づきから単に伝承してだけでなく、新たな文化を創出していく機会となる可能性もあるのではないかと。具体的に学びを看護に活かすカテゴリーが得られたが、病気や健康を考える豊かな感性を持つ看護学生だからこそ、地域の人と共に創出できる健康文化もあり得るのではないかと考える。

6 まとめと今後の課題

以上のことより、地域の文化は看護における対象者を理解するうえでも重要な背景となるものであり、沖縄の文化を地域での実践や看護に活かすことで継承できることに気づく等、文化の重要性を本科目で培い、対象理解と看護への適用に活用できることが示唆された。今回の学びを踏まえて、高齢・在宅ケア看護領域カリキュラムにおける2年次後期の「高齢者看護学概論」、3年次の「高齢者看護方法論」「臨地実習」でも、文化と看護への適用について検討し、講義を組み立てる必要がある。また、県外出身の学生の地元文化についての紹介や受講動機なども授業内容に盛り込むことで、具体的に比較検討でき、学習意欲を高めるものと考えた。

VII おわりに

知念ら（2011）は、沖縄における地域文化的看護体験として、「看護職者は、患者や家族・住民の地域文化的な様々な風習、行動パターン、生活様式に対して理解・共感し、精神的安定や健康への危険性を見極めて対応していた。そして地域文化的な特徴を活用している事がわかった」と述べており、佐藤ら（2005）は、看護においては「人間」の形成には文化が関わっており、その要素としての「病気」・「生活技術」・「家族」・「地域」は、他の様々な要素との「関係」のなかで成り立っているものとして捉え、その「関係性」に注目していくことが重要であると、人間形成における文化が時代と共に変化し続けるものとして対象を捉えることの必要について説いている。沖縄北部に位置する本大学が魅力ある文化を伝承しながらも、多くの異文化交流の拠点となって、看護学生の文化的感受性を高めつつ、新たな健康文化の創出を提案できるのではないかと考える。

引用文献

- 小野聡子，山本八千代（2011）：「看護者の異文化間能力に関する文献検討」川崎医療福祉学会誌，20（2），507-512
- レイニンガー M. M.，「レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性」，医学書院，1995.
- 佐藤紀子，井出成美，宮崎美砂子（2005）：地域健康支援における文化に関する文献検討，千葉看会誌，11（1），79-86
- 杉本洋（2006）：生活の営みへの接近と参与—文化とヘルスプロモーションの視点から検討する関わり—，新潟医福誌，6（1），41-47
- 知念久美子，野村幸子，盛島幸子 他（2011）：沖縄における地域文化的看護体験，文化看護学会誌，3（1），30-37

参考文献

- 古市清美，高橋ゆかり，鹿村真理子（2010）：「看護と医療人類学」における病についての学び—看護学生の親世代および祖父母世代を対象としたインタビューを通して—：上武大学看護学部紀要，6（1），19-27
- 稲垣絹代（2000）：超高齢過疎地区で高齢者が生きる意味—瀬戸内島嶼部での民族看護学的アプローチ—，老年看護学，5（1），124-130
- 金城八津子，畑下博世，河田志帆，他（2013）：離党に居住する生活機能低下をきたした独居高齢者の“生活

の術”，日本地域学会誌，16（2），63-70

- 正木治恵，山本信子（2008）：高齢者の健康を捉える文化的視点に関する文献検討，老年看護学，13（1），95-102
- 波平恵美子（2006）：「病の語り」について—医療人類学の立場から—，日本保健医療行動科学年報，21，18-26
- 辻村真由子，野地有子（2012）：「平成24年度留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット（SSSV）による異文化看護（Transcultural Nursing）プログラムの取り組み—ソウル国立大学看護学部へのショートビジット（SV）—」，千葉大学大学院看護学研究科紀要，36，39-45
- 牛尾裕子（2004）：看護管理に活かす看護理論のエッセンス—レイニンガー「文化」に着目した質の高いケアの追求—，看護管理，14（7），603-607
- 城ヶ崎初子，藤原聡子，中島小乃美，他（2008）：マデリンM. レイニンガーの文化的ケア理論に基づく看護援助に関する試論，大阪市立大学看護学雑誌，4，11-19